2003 年 1 月 7 日

人間科学研究科委員長 殿

伊藤拓 氏 博士学位申請論文審査報告

伊藤 拓 氏 学位申請論文の審査委員会は，人間科学研究科の委嘱を受けて審査を行ってきましたが，2003 年 1 月 7 日に審査を終了しましたので，ここにその結果を御報告します．

記

1. 申請者名 伊藤 拓

2. 論文題名

うつ状態の心理的要因としてのネガティブな反すうの検討

3. 本論文の主旨，概要，評価

1) 本論文の主旨

本研究の目的は，1）ネガティブな反すうがうつ状態を引き起こす心理的要因であるかを検討すること，2）ネガティブな反すうとうつ状態との関連の程度と，代表的な抑うつの心理的要因とうつ状態との関連の程度を比較すること，3）抑うつ発症の心理学的的メカニズムの中に，ネガティブな反すうがどのように位置づけられるかを検討することである．以上の目的を完遂するために，ネガティブな反すうを測定する尺度を開発し，信頼性・妥当性の検討を行った上で，ネガティブな反すうが，従来の代表的な抑うつの心理的要因よりもうつ状態と強く関連し，しかもうつ状態の原因となっていることを縦断的な研究を行うことによって示している．また，従来の抑うつの心理的要因がうつ状態を引き起こすメカニズムの中に，ネガティブな反すうが介在することを縦断的な研究によって示し，新たなモデルを提案している．

2) 本論文の概要

第 1 章では，代表的な抑うつの心理的要因を展望し，特に，抑うつの持続・重症化を取りあげている要因では，共通して「反すう」（物事を長い間繰り返し考えること）が重要な要素であることを指摘した．さらに，他の代表的な抑

うつの心理的要因にも反すうと共通する要素があることを指摘し，抑うつの心理的要因として反すうを取り上げる意義を主張した．特に，反すうと抑うつに関する先行研究の展望を行い，1）反すうの原因を目的の阻害に限定していること，2）反すうする対象がポジティブな内容か，ネガティブな内容なのかを区別していないこと，3）反すうを測定する尺度は，妥当性や信頼性の検討が不十分であること従来の研究における問題点を指摘した．最後に，これらの問題点を踏まえて，本研究では，反すうの原因を限定せず，対象をネガティブなこととした「ネガティブな反すう」（その人にとって，嫌悪的・否定的なことを長い間繰り返し考えること）という独自の概念を取り上げ，うつ状態との関連を検討している．

第 2 章では，本研究の目的と意義を述べた．第 1 の目的は，ネガティブな反すうが，うつ状態を引き起こす心理的要因であるかを検討することである．第 2 の目的は，ネガティブな反すうとうつ状態との関連の程度と，いくつかの代表的な抑うつの心理的要因とうつ状態との関連の程度を比較することである．第 3 の目的は，抑うつ発症の心理学的メカニズムの中に，ネガティブな反すうがどのように位置づけられるかを検討することである．以上の検討によって，本研究には，うつ状態を引き起こす上での影響力の大きさが明らかになること，異なる抑うつの心理的要因がうつ状態を引き起こすメカニズムについての理解が進む意義があると述べている．なお，本研究では，うつ状態を 2 週間以上持続する抑うつとした．

第 3 章では，ネガティブな反すうを測定するための質問紙の作成を行った．その結果，「ネガティブな反すう傾向」，「ネガティブな反すうのコントロール可能性」の 2 因子からなるネガティブな反すう尺度が作成され，尺度の妥当性と信頼性を確認した．以下の研究では，この尺度を用いてネガティブな反すうの検討を行っている．

第 4 章では，先の目的 1 と 2 を検討するために，ネガティブな反すうと従来の代表的な抑うつの心理的要因との比較を行っている．その結果，ネガティブな反すうは，帰属スタイル，非機能的態度，完全主義，メランコリー型性格，執着性格といった代表的な抑うつの心理的要因より，うつ状態との関連が強いことを示した．また，「ネガティブな反すう傾向」と「ネガティブな反すうのコントロール可能性」のお互いを統制した上で，うつ状態との関連を検討したところ，うつ状態と関連があるのは，「ネガティブな反すう傾向」だけである

ことが示された．次に，性格の 5 因子理論を用いて，「ネガティブな反すう傾向」は，性格の 5 大因子の中で抑うつと関連が深い神経症傾向と正の相関があるか，およびその相関の程度は，代表的な抑うつの心理的要因と神経症傾向との相関の程度と比べて大きいかを検討した．その結果，「ネガティブな反すう傾向」は，神経症傾向との間に比較的強い正の相関があるとともに，従来の抑うつの心理的要因と比較して，神経症傾向との相関が強いことを示した．

第 5 章では，目的 1 を検討するために，ネガティブな反すうがうつ状態の発症を予測するかどうかを 8 ヶ月間の予測的研究によって検討している．その結果，「ネガティブな反すう傾向」はうつ状態の発症の程度を予測することを示した．

第 6 章では，目的 3 を検討するために，代表的な抑うつの心理的要因から，反すう型反応，非機能的態度，執着性格，完全主義を取り上げ，それらの要因がうつ状態を引き起こすメカニズムの中に，ネガティブな反すうがどのように位置づけられるかを検討している．その結果，1）反すう型反応はうつ状態の程度を予測するが，「ネガティブな反すう傾向」を統制したならば，反すう型反応とうつ状態の関連は見られないこと，2）非機能的態度，執着気質，完全主義と「ネガティブな反すう傾向」との間には，正の相関があるとともに，うつ状態を予測するのはネガティブな反すう傾向だけであること，およびそれらの心理的要因がうつ状態を引き起こすメカニズムには，ネガティブな反すう傾向が介在するというモデルが妥当であることを示した．これらの結果から，従来の抑うつの心理的要因がうつ状態を引き起こすメカニズムには，ネガティブな反すうが介在することが示唆された．

第 7 章では，本研究の結果がまとめているとともに，総合的な考察を行っている．本研究のまとめとして，第 6 章の結果に基づき，従来の抑うつ発症の心理的要因モデル（ＡＢＣモデル：ライフイベントを指すＡが，直接的に，抑うつを指すＣを引き起こすのではなく，両者の間には，心理的要因であるＢが介在するというモデル）に変えて，ＢとＣの間には，Ｎ（ネガティブな反すう）が介在するというＡＢＮＣモデルが提唱された．また，最後に本研究の限界点として，1） ネガティブな反すうによるうつ状態の説明率が低いこと，2)対象者が大学生のみであり，本研究の結果を他の対象者へ一般化することはできないこと，3)不安や怒りなどとの関連の検討を行っておらず，ネガティブな反すうがうつ状態に特異的な要因であるかは示されていないこと，などが挙げられ

た.

3) 本論文の評価

本論文において評価できる点を以下にまとめる.

① 先行研究では，数多くの心理的要因モデルが提唱されてきたものの整理が行われておらず，それらの要因に共通する要素についての検討は行われてこなかった．本研究では，従来の抑うつの心理的要因を展望した上で，心理的要因が抑うつを引き起こす上での共通要素として，反すうの存在が重要であることを明らかにしている.

② 反すうと抑うつに関する研究は，欧米を中心にして，数多く行われてきたが，反すうの対象がネガティブなことなのか，ポジティブなことなのかの区別がなされてこなかった．本研究では，抑うつのリスクファクターとしての反すうを研究する際に，反すうの対象をネガティブなものに限定するべきであるという結論を導き出している.

③ 本研究では，抑うつに代表的な心理的要因との比較を行い，ネガティブな反すうが従来の抑うつの心理的要因よりも，うつ状態との関連が強いことを示した．このことにより，うつ状態への介入を考える際に，ネガティブな反すうが注目すべき心理的要因であることを示している.

④ うつ状態の発症は，従来の抑うつ発症の心理的要因モデル（ＡＢＣモデル）では説明できないことを示し，従来の心理的要因がうつ状態を引き起こすメカニズムに，ネガティブな反すう傾向が介在し，新たなうつ状態発症モデル（ＡＢＮＣ）を縦断的研究からの実証的データに基づいて示している.

以上の点を評価して，本論文は，博士（人間科学）の学位を授与するに値すると判断した.

4. 伊藤　拓 氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学 教授	Ed.D.（ボストン大）	竹中 晃二
審査委員	早稲田大学 教授	教育学博士（筑波大）	坂野雄二
審査委員	早稲田大学 教授	博士（医学）（東京大）	野村　忍
審査委員	広島国際大学教授	教育学博士（筑波大）	上里一郎